

平成二十一年一月一日発行（毎月1回1日発行）通巻八二八号  
昭和二十五年四月二日第三種郵便物認可

# 火星

平成二十一年一月号



七曜抄 (五)

山尾玉藻

耳袋離宮の塀に沿ひきたる

観音の里の白菜しまる夜

遠き雷なまこの水にありにけり

冬の日を孔雀の羽が立て直す

橋桁の水かげろふも年の暮

闇鍋の膝をくづさず終りけり

ビル風のねぢるるところ社会鍋

ブロッコリー畑の名残の空なりし

大年の日の当りある屋敷神

風花に消防団の手締めかな

# 太白星

柳生千枝子

馬肥えて眼前通り過ぐ早さ  
馬肥ゆる首筋しやんと立てて行く  
馬肥えて歩み去る歩の美しき  
蚯蚓鳴く深夜の池に鯉眠り  
遥拝す帝の堀に秋の雲  
夕焼の寒さ独り身なる寒さ  
手をつなぐ母の手少し輝す

杉浦典子

烏瓜登りはじめにはぐれけり  
真葛原ひなたの石に腰下ろす

宇治線に乗り換へてより秋深し  
清め砂はなれて双つ鴉日和  
秋うらら鴉小屋の汚れ見てしまふ  
茶だんごの串横に引く鴉の晴  
兎の耳つけて月夜の踊り子は

浜口高子

釣瓶落し三和土に魚の跳ねにけり  
新藁に囲まれてゐる家の書架  
山祇の風のぶつかる種瓢  
雁渡し台車にヨット運ばるる  
帰りくる者のなかりし茸飯  
口中にとんぶりぷちつと秋深む  
対岸の滾り見つむる秋鴉かな

# 火星作品

山尾玉藻選

魯田に神が遊びに来る夜かな  
八幡 大山文子  
不機嫌な母に椋鳥増えにけり  
駿河屋に朝日射し込む水の秋  
篝来て音失せにけり秋の川  
一村は煙の底や初紅葉  
遊ぶやうゆく葛原の真昼かな  
宝塚 山本耀子  
百五歳の枢こつんとぎくろの実  
角切りしこぐちに滲むものを見し  
十三夜鹿のぬた場の光りけり  
新畑の傾なりの諸といふかたち  
虫籠の乾きしままに吊られあり  
神戸 深澤 鱧  
鶏頭を押しして舟屋を覗きけり  
秋潮に屈めばひろき舟屋かな

秋の鵜の水を離れて眠りをり  
狼籍もなき遊船の秋簾  
十六夜の内緒ないしよと亀のかほ  
棒持つて真葛原を子がゆきぬ  
二三日下駄箱の上のひよんの笛  
残る蚊にふたりの食ふる蜜柑の香  
余呉村のもとより釣瓶落しかな  
角伐の近き角の枝朝日さす  
よき人と沖の波聞く秋の昼  
舟宿の小さき座布団千鳥啼く  
与謝に友ひとりありけり衣被  
あいさつの度に鳴る帯日短か  
舟屋より空のひろがる秋つばめ  
鶏頭花枯るるとききて枯れにけり

雑魚の影二手に釣瓶落しかな

土曜日の小学校の初もみぢ  
金星に吠をはたく秋収

宝塚 山田美恵子

大和郡山 城 孝子

明石 戸栗末廣

# 選のあとに

山尾 玉藻

秋の鵜の水を離れて眠りをり 深澤 鱧

同じく宇治詠である。シーズンを終えた鵜飼舟が川辺に繋がれ、中の島の鳥屋ではオフタイムの鵜がのんびりと羽繕いをしていた。ところで、掲句の「鵜」は辺りに生息する自然の鵜であり、鑑賞する側は「鵜飼」に左右されるべきではない。「水を離れて眠りをり」の描写より、鵜のこころの寧ろぎ、川の澄みよう、静寂な時間の流れなど、もろもろが窺える。素気ない表現でものをだけを投げだしているが、それ故に見えるべきものが見えてくる。

十六夜の内緒ないしよと亀のかほ 山田美恵子

池の亀かそれとも水槽の亀が、首を伸ばして「十六夜」の明るさを覗っていたのだろう。月を仰いでいた作者は偶然にその亀と眼が合ったのである。とぼけたその顔が「内緒ないしよ」と言ったように感じたところに諧謔がある。もしや作者、夜遊びから忍び足で戻ってきたところではなかったか。

角伐の近き角の枝朝日さす 城 孝子

角伐会が近づく頃ともなれば、鹿の角は驚くほど立派に成長する。しかもそこに朝日が差せば、その勇猛さは一層際立つことだろう。ところで掲句、耀子作品のように鹿への憐憫を直接には述べていない。しかし、伏線として鹿への同情心がしっかりと敷かれている。「角の枝」の口吻や「朝日さす」の景で読み手に角を強く印象づけ、それほどの角が伐られる様子を自ずと想像させるところ、それは明かである。

(以下略)

篝来て音失せにけり秋の川 大山 文子

宇治吟行で詠まれた一句。田楽まつりの始まった中の島に火の粉を零しながら篝火が着岸すると、忽ち夜闇は掻き消され、川辺は華やかで雅な世界に一変した。掲句、実際に川音が失せる筈はないのだが、篝の余りの美しさなところを奪われた作者の実感であったのだろう。この実感、「秋の川」でなければ得られなかった筈である。同時発表の「駿河屋に朝日射し込む水の秋」、単なる一景を「水の秋」がしっかりと受け止めて詩の世界を呼んでいる。

百五歳の柩こつんとざくろの実 山本 耀子

百五歳の方の葬に、悲しみよりはむしろ天寿を全うしためでたさと思われる。担ぎ出された柩が傍らの「ざくろの実」に触れたのであるが、しっかりと黒斑が浮く艶やかな「ざくろの実」が長命のイメージにいかにも相応しい。「こつん」も死者を寿ぐむびきのように、いよいよおめでたい。同時発表の「角切りしこぐちに滲むものを見し」には小さな驚きがあり、作者が鹿への憐憫の思いを深くしたことが窺い知れる。

# 恒星圈

同人 I

河崎尚子

長月のひねもす濡るる貴船道  
咽とほる水の冷たし薄紅葉  
火祭の男脱ぎたる緋の襦袢  
担ぐ背を鞍馬祭の火の粉はふ  
締込みに湯気たつ鞍馬祭かな

加古みちよ

小池楨女

石垣の石のしろさも水の秋  
街騒を離れてしばし鳥渡る  
たつぷりと日のあるうちの藪からし  
一面のコスモス畑の吹かれやう  
落ちさうで落ちぬ蠟螂枝の先

いわし雲草引くことの楽しくて  
柿・蜜柑庭に色づく良き日射し  
宮司けふ松の手入れをしてゐたり  
敗荷の葉うらを返す風なりぬ  
城下町にのこる川筋ゆりかもめ

金澤明子

小林成子

曼珠沙華芯のもつれは眼もて解く  
銀鈴を降らせ頬白ほほま白  
付け替ふる釦のゆるみ野分あと  
水引草の紅ぼつちりと祖母の墓  
溪流を見てあたたかく障子閉づ

色変へぬ松より返す河口かな  
畦をきし裾濡れてゐる十三夜  
葛の花小さき水門見つけたり  
楽屋口のじゆうたん紅し水の秋  
板塀のひとつ弾けし荔枝なる

# 獅子座

山尾玉藻推薦

松井倫子

通過車に列車の傾ぐ秋の暮  
合流の白くふくるる寝待月  
古代米のいろいろに鳥渡りけり  
初鴨や大仏殿の影の内

重見久子

秋の虹男所帯に一鍵二つ  
月明の刈田の見ゆる夜伽かな  
蜻蛉連れ庭師が一人出で来たる  
神留守の窓辺に移す体重計

かわばたとしお

鍬洗ひをり短日の山の池  
筑波嶺を去らぬ雷雲稲熟る  
秋耕の人にもつとも夕日濃し  
人の列はなれ山路の秋惜しむ

藤原冬人

インク壘廻して見ゆる冬の海  
茶の花やランドセルの鈴鳴りゆけり  
雨あとのスコップの柄に鷄来る  
いつ売れる店のこけしぞ菊にほふ

岩井ひろこ

口切りを終へし茶壺や天高し  
平等院の裏道尽きぬ実紫  
うそ寒の闇を広ぐる篠の笛  
鼓笛隊遠のいてゆく刈田かな

奥田順子

菊人形ほどいてゐたる香でありし  
老斑の手に活けられし秋薔薇  
茶畑に幟立ちぬる霜の晴  
川音の杳ぬぎ石や菊膾

松山直美

手水場に大き姿見鴟の晴  
にぎり酒仏徳山に月上る  
秋冷の対岸離る篝舟  
しづかなる鵜小屋にほへる秋の暮